

人も自然も苦しめるリニア中央新幹線について、講演とシンポジウム

2017年11月11日（土）午後、玉穂生涯学習館において、リニア中央新幹線についての講演会とシンポジウムが行われました。（主催/山梨リニア沿線住民の会、協賛/リニア・市民ネット山梨）

第Ⅰ部の講演は、中央市在住の伊藤洋さん（山梨大学名誉教授、前山梨県立大学長）が、「アラカン山脈にトンネルを掘る～JR東海リニア中央新幹線計画」と題して、リニアの危険なまた否定的な側面を次々と指摘した。アラカン山脈とは、太平洋戦争末期に日本軍が強行して大失敗したインパール作戦の時に超えた山脈だが、南アルプスにトンネルを掘ってリニアを通そうとするのは、このアラカン山脈越えに似ているという。

両者の共通点として、

1. しなくてよかった作戦。
2. 強烈な個人の突出を容認。（牟田口廉也/葛西敬之）
3. ビルマ攻略作戦と東海道新幹線の成功体験。
4. ガダルカナル島、レイテ沖海戦の敗戦からの起死回生という意図とJR東海の再生
5. 長大山脈を縦走、突破するという無謀計画。

などを挙げ、その理由として、

1. 南アルプスはメランジェ層から成る水がめで、そこにトンネルを掘るわけで、豆腐に横穴を開けるようなもの。難工事が想定される。ほくほく線鍋立山トンネルの例。
2. 南アルプスは隆起率の高い山で危険。
3. リニアの必要性がない。すでに車輪形式で相応のスピードが出せるようになった。
4. 新幹線の利用客の減少。（バス、飛行機は増加）
5. 今後、大阪が没落し、東京のみが繁栄。（ストロー効果）
6. 他の新幹線との乗り入れ不能という不自由さ。
7. 所要電力量の多さ。200万kWを想定。

などを、主な理由として挙げた。

続いて第Ⅱ部のシンポジウムでは、冒頭に飯田新駅周辺整備事業で土地の収用対象になる住民の中から、熊谷清人さんが、20余名の立ち退き拒否者かの代表として、現状を報告した。現住地を離れたくないという強い意志と、集団の合意形成の難しさなど、抱えている問題を話された。

次に、笛吹市以西の各市町（甲府市、中央市、南アルプス市、富士川町）などから現状報告があり、最大の関心事は騒音、日照問題で、フードを被わずに住宅地を通過する高架方式に、強い憤りが示された。一日中70～75dBの騒音にさらされたら、健康被害も予測されるが、一方、住民の要望に対し、まったく真摯に対応しようとならないJR東海への怒りも、多く示された。自治会を中心に、まとまって取り組んでいる地域もあり（甲府市、南アルプス市など）、JR東海が県や市町などに問題を投げて任せ切っているような感もあって、行政や事業者の不誠実な対応が鮮明にされた。

最後に騒音実験が行われ、70～75dBの騒音の中にあることがどのようなものかを体験した。県はガイドウェイの両側各400mを、70dB以下に押さえるという指針を出しているが、400mまでもの範囲に70dBもの音が昼夜を問わず、鳴り響いて、時間ごとに10本前後のリニアに通過されたら、住民の生活は完全に破壊されるであろうことが実感された。（川村記）